

「フランキー&アリス」 ★★★

2014 (平成26) 年10月19日鑑賞

シネ・リーブル梅田

監督：ジェフリー・サックス

フランキー (解離性同一性障害をもつ黒人女性) / ハル・ベリー

オズ (精神科医師) / ステラン・スカルスガルド

エドナ (フランキーの母親) / フィリシア・ラシャド

マキシム/チャンドラ・ウィルソン

パール/ロザリン・コールマン

スーザン・ショウ看護師/ジョアンヌ・パロン

バックマン博士 (精神科医師) / ブライアン・マーキンソン

ハル/アレックス・ディアカン

ティナ/メラニー・ババリア

ワンダ/キーラ・クラヴェル

クリフ (フランキーが働くクラブのDJ) / エイドリアン・ホームズ

2010年・カナダ映画・101分

配給/プレシディオ

<解離性同一性障害とは？1人2役、いや、1人3役に！>

黒人の父親と白人の母親をもつハーフのハル・ベリーが、『チョコレート』(01年)で強烈なラブ・シーンを含む大熱演を魅せ、アフリカ系アメリカ人初のアカデミー賞最優秀主演女優賞を受賞したのは2002年のこと(『シネマールム2』43頁参照)。以降、彼女は『007/ダイ・アナザー・デイ』(02年)(『シネマールム2』117頁参照)でのボンド・ガール役や『X-MEN』シリーズ等で活躍してきたが、ハッキリ言ってこれらはあまり大した作品ではなく、ハリウッド特有のシリーズものばかりだった。そんなハル・ベリーが映画化の権利を10年もかけて掴みとり、自らプロデューサーも務めた本作では、久しぶりに演技派女優として解離性同一性障害の主人公役に挑戦！

タイトルの『フランキー&アリス』は『ジキルとハイド』と同じように、現在、人気黒人ストリッパーとしてロサンゼルスで働いているフランキーという女性の中に、もう1人アリスという白人の人格を持った女性が存在していることを示している。しかも、アリスは強烈な人種差別主義者でセレブ志向の白人女性だから、その矛盾は大きい。そのうえ、精神科医師のオズ(ステラン・スカルスガルド)の治療を受けていく中で明らかになるのは、何ともう1人、天才(ジーニャス)の人格もあるらしい。したがって、本作ではハル・ベリーは「1人3役」を演じることになるから、大変だ。近々鑑賞予定の『嗚う分身』(13年)はドストエフスキーの『分身(二重人格)』を原作とした、同じような「二重人格」をテーマにした映画だから、よく比較鑑賞しなければ・・・。

<3つの人格をどうやって治療するの？>

本作は「実話に基づく物語」らしいが、冒頭で見せる黒人ストリッパーとしてのハル・ベリーの踊りは妖艶そのもの。2人の手持ちの女優とは思えないし、その後一緒に働いているDJの黒人男クリフ(エイドリアン・ホームズ)の家にしげこむシーンでは色気ムンムン。ところが、その後の濃厚なベッドシーンを期待していると、フランキーは突然白人の人種差別主義者の女アリスに変身して男を罵倒し始めたから、これには観客以上に黒人男がビックリ！

また、ストリッパー仲間たちと雑談している中で、フランキーは自分がいとも簡単に新聞のクロスワードを解いていたことを知らされ、自分でもビックリ！私の字ではないし、ウソでしょう、と思ったが、これぞフランキーの中の「天才」がなせるワザらしい。もっとも、これくらいの出来事ではフランキーが解離性同一性障害だとわかるはずはないが、DJの男を傷つけたり、道路上に飛び出して意識を失ったりと、警察沙汰が続き、精神鑑定を受ける必要性が認定されてしまうと・・・。

フランキーが幸運だったのは、病床が空いていないことを理由にフランキーをすぐに放り出そうとしたバックマン博士(ブライアン・マーキンソン)ではなく、フランキーの病状に興味を示すオズ医師が担当医となったこと。そこから始まった2人3脚の治療ぶりが本作のメインストーリーになるが・・・？

<熱演比較 キーラ・ナイトレイVSハル・ベリー>

ここで私が思い出したのが、『危険なメソッド』(11年)における私の大好きな美人女優キーラ・ナイトレイの演技。彼女は心の奥深くに潜むアブノーマルな性的欲望の治療のため精神分析医ユング(マイケル・ファスベンダー)の治療を受けたが、口をゆがめ顔を引きつらせながら叫びまくる演技やベッド上で鞭打たれる演技を大胆に見せてくれた(『シネマールム29』121頁参照)。

本作で1人3役を演じるハル・ベリーもそれに負けず劣らずの熱演を見せてくれる。その熱演によって彼女は第68回ゴールデングローブ賞最優秀主演女優賞にノミネートされたわけだが、残念ながら色気面でイマイチ・・・。私の好みでは、同じタイプの熱演比較では、本作のハル・ベリーより、『危険なメソッド』のキーラ・ナイトレイの方に軍配を！

<だんだん学究的になってくると・・・>

『危険なメソッド』の評論で、私は「いかんせんあまりにも学術論争が多すぎ！したがって、勉強にはなるが、『映画はエンタメ』という本質からはイマイチ・・・？」と書いたが、本作でもそれは全く同じだ。オズ医師にとってフランキーは研究の素材として絶好。しかし、なぜフランキーにそういう特異な症状が出ているのかについてとことん学究的になっても、観客にとってはそれは退屈。フランキーがストリッパーとして踊っているのは1970年代のロサンゼルスだが、彼女は若い頃どこで何をしていたの？オズ医師がフランキーの治療を進めるについて、そんな身上・経歴は最も基本的なデータだ。スクリーン上の回想シーンによると、若き日のフランキー(これもハル・ベリー？それとも別人？)は、母親と共に白人家庭のメイドとして働いていたらしい。

そんなシーンを見て思い出したのが、60年代初頭の南部におけるヘルプ=黒人メイドを主人公にした『ヘルプ ～心がつなぐストーリー～』(11年)(『シネマールム28』42頁参照)。同作では、第84回アカデミー賞主演女優賞に黒人女優ヴィオラ・デイヴィスが、助演女優賞に黒人女優オクタヴィア・スペンサーと白人女優ジェシカ・チャステインの計3人がノミネートされたが、60年代前半のアメリカ南部のミシシッピ州では「黒人メイド専用のトイレの設置を！」というトイレ論争が問題の発端になるほど、黒人差別は深刻だった。

したがって、それと同じ時代に黒人メイドだった若き日のフランキーが、いくらカッコいい白人男性から「好きだよ」「一緒に家を出よう」と言われ有頂天になっても所詮・・・？しかも、その「愛の逃避行」の途中、車の衝突事故で肝心の恋人を失ってしまえば、そのトラウマは・・・？なるほど、なるほど。そんな風に学究的に調べていけば、フランキーの解離性同一性障害の原因も少しずつ解明できそうだが、他方、「天才」の人格は・・・？もっとも、観客にとって、そんな学究的解明はある意味どうでもいいのでは・・・？

<医師と美人患者との距離感？ねんごろになる危険は？>

本作でオズ医師役を演じたステラン・スカルスガルドは1951年生まれだから、ほぼ私と同世代。ラース・フォン・トリアー監督の出世作となった『奇跡の海』(96年)で同じくその名を世界中に知らしめることとなった俳優だ。その後、『ダンサー・イン・ザ・ダーク』(00年)、『ドッグヴィル』(03年)(『シネマールム4』135頁参照)、『メランコリア』(11年)(『シネマールム28』169頁参照)と同監督とのタッグが続き、最新作は9月9日に観た同監督の『ニンフォマニアック Vol. 1/Vol. 2』(13年)だ。「ニンフォマニアック」とは「色情狂」のこと。ラース・フォン・トリアー監督のミューズである英国人女優シャルロット・ゲンズブールをヒロインとした、延々と続くケツタイな色情狂ぶりはそれなりに興味深かったが、エッチ度では断然昔の「日活ロマンポルノ」の方が上！そのヒロイン(?)が語る「性の旅路」の聞き手となったのが、ステラン・スカルスガルド演じる初老の男セリグマンだ。読書好きのセリグマンは、釣り、音楽、数学、文学、芸術、宗教、歴史など幅広い分野にわたって博識ぶりを見せてくれたから、「聞き手」としては最適だったが、ラストではこのセリグマンがあつと驚く暴挙に出たことによって、あつと驚く結末に・・・。

他方、『危険なメソッド』でもヒロインの治療にあたる精神科の主治医ユングに対して、精神分析医でありながら薬物に溺れている快楽主義者の患者が、公然と「一夫一妻制」を否定し、「患者の女と寝たことはあるか?」「快楽を拒むな」「衝動に降伏しろ」とアドバイスしていたから、これがユングの深層心理にいかなる影響を？

外科や内科の手術はチームプレイだから、医師と患者が個人的にねんごろになる可能性は少ないが、精神科の場合は一対一での聞き取りがメインとなるうえ秘密厳守だから、その分医師と患者がねんごろになる可能性が高い。『ニンフォマニアック Vol. 1/Vol. 2』では、ステラン・スカルスガルド演ずる初老の男セリグマンは、結末では強固な「信頼関係」(?)をいいことに、ある「暴挙」に出たが、そのステラン・スカルスガルドが扮する本作の医師オズは、フランキーに対して同じような問題は起こさないの？私は思わずそんな心配もしたが、現実とはともかく、少なくともスクリーン上ではそういう場面は登場しないので、ご安心を・・・。

<原因説明=治療？これでは尻切れトンボ感が・・・>

本作は「実話に基づく物語」。そして、ハル・ベリーの熱演で、日ごとに力を増していくアリスの存在に脅かされながらも、フランキーが本当の自分を取り戻すことを決意し、病を引き起こした原因だと思われる過去のトラウマと向き合おうとする姿が本作の売りだ。中盤から後半にかけて、オズ医師の「治療」によってフランキーのトラウマになっていた白人の恋人を失った過去が明らかにされ、病気の原因説明は順調に進んでいく。しかし、解離性同一性障害のような難病で原因の説明が進むことは、どこまで治療に役立つの？原因説明の完成=治療なら、気楽でいいが、きっとそうではないはずだ。

本作でハル・ベリーは、①色気タップリの黒人ストリッパー(といってもそれは最初だけだが)、②人種差別主義者の白人女性、そして③幼児のようなしゃべり方をする天才(=ジーニャス)の3者を見事に演じ分けているが、それはあくまで本作をスクリーン上で観た場合の話。解離性同一性障害の患者その人はそれを意識できないのだから、いくら過去のトラウマに立ち向かうと言っても、その治療は具体的にどうするの？そこらあたりが十分わからないまま、本作ではフランキーの解離性同一性障害の原因説明=治療のような形でジ・エンドになるから、尻切れトンボ感が・・・。そのため(?)日本生まれ、ブラジル在住の「映画男」のブログ「ただ文句が言いたくて」では、100点満点で36点をつけられ、ボロクソに文句を言われてしまったのでは・・・。

フランキーのような解離性同一性障害の治療って一体どういうこと？誰かそれを教えてくれる人はいませんか？